

戦後（1945～1950） その4

《昭和22年多摩川水害が、知られていない！》

1947年（昭和22）9月14日、多摩川流域は、カスリーン台風の影響で、2日間に約380ミリの大雨が降り（注1）、多摩川は、濁流が、堤防を越えあるいは破壊し、約10万戸が浸水し、耕地約2800haが冠水しました。

この2日後の16日未明には、利根川が破堤し、濁流が、4日後には東京下町まで押し寄せ、約15万戸（注2）が浸水しています。

多摩川の浸水戸数は、利根川の浸水戸数の3分の2と、かなりな規模となりますが、不思議なことに、新多摩川誌（注3）にも具体的な記述がなく、浸水箇所の資料や被害写真をいまだ見たことがありません。

当時、多摩川の改修や維持をしていたのは、内務省関東土木出張所京浜工事事務所（現京浜河川事務所）であり、利根川の破堤地点を担当していたのは、関東土木出張所栗橋工事事務所（現利根川上流河川事務所）でした。

多摩川水害の資料が少ないのは、関東土木出張所が、被害が大きく、氾濫流が東京に押し寄せてくる利根川の復旧に忙殺されていたからだと推察します。また、翌1948年（昭和23）7月には、建設省関東地方建設局に変わりましたから（注4）、行政組織そのものが混乱していたこともあるでしょう。

今年（2017年）は、カスリーン台風から70周年に当たるということで、利根川流域では、当時を振り返るさまざまな企画展示などが行なわれています。多摩川も、昭和22年水害の資料を発掘して、企画展示できるようになれば素晴らしいと思います。

ちなみに、現在の多摩川の治水工事は、昭和49年と昭和51年に発生した洪水を安全に流すことを、当面の目標に進められています。両洪水とも、流域に、2日間で約330ミリが降って引き起こされたものです。（注5）

また、多摩川の洪水浸水想定区域図は、2日間に457ミリの雨が降って破堤したときの浸水区域を示しています。多摩川より少し大きな鬼怒川は、2015年（平成27）、441ミリ（注6）が降って破堤しましたから、多摩川の浸水想定は、絵空ごとではありません。

（注１）約３８０ミリは、石原地点上流の流域平均２日雨量。

（注２）利根川の破堤・氾濫被害は、流失・全壊家屋６００戸，浸水家屋１４５５２０戸（内東京１０５５００戸）・・防災科学研究所資料より

（注３）多摩川とその流域について、約９０名の学識者の論文をまとめたもので、多摩川研究のバイブルとなっている大著。企画は、関東地方整備局京浜河川事務所、発行は、（財）河川協会

（注４）京浜工事事務所は、１９４３年（昭和１８）、「多摩川改修維持事務所」「東京新京浜国道事務所」「鶴見川改修事務所」「横浜新京浜国道事務所」が合併して、川崎市川崎区元木町に設置。ところが、１９４５年（昭和２０）４月１５日の城南京浜大空襲で焼け、鶴見川の末吉橋そばに移転。

この内務省京浜工事事務所誕生から、建設省京浜工事事務所へ移行する直前の６年間、所長は中村政男でした。彼は、総理府の外局として創設された北海道開発庁の地政課長に転出しています。

（注５）昭和２２年の洪水の規模は、昭和４９年と昭和５１年洪水を上回っていた可能性もありますが、当時、流量が観測されておらず、戦後に発生した最大の洪水流量は、データが存在する昭和４９年と昭和５１年洪水になります。

（注６）４４１ミリは、鬼怒川石井地点上流の流域平均最大２４時間雨量。

写真、①カスリーン台風の浸水区域図（関東地方整備局ＨＰ掲載資料に細見加筆）、②最下流部における多摩川洪水浸水想定区域図（京浜河川事務所ＨＰより）

